

become of ~「～はどうか」、without fail「必ず」など —調べてみました、日頃の疑問—

酒井 典久

最近疑問に思ったことを調べてみました。英語表現の豊かな背景やある語同士が意外な関係でつながる面白さなどをお伝えできれば幸いです。

Q: become of ~ 「[what, whatever を主語として]～はどうか」という表現はどうしてそのような意味になるのでしょうか。
What has become of your friendship?
「あなた方の友情はどうなったのですか」

A: この表現の become は「～になる」という意味ではなく、be は「近くに (about)」、come は「来る」、よって become は「近くに来る→生じる、起こる (come about, happen)」という意味です。三省堂の『ウィズダム英和辞典』の自動詞用法の2番目に載っています。また、of は out of ~「～から」という意味です。したがって例文の What has become of ~? は「何が～から(結果として)生じたか→～はどうなったか」という意味になります。

ついでに、become の be- についてももう少し見たいと思います。OED によりますと、この be- は接頭辞で、現在の形容詞、副詞である「(～の)そばに」の by の強勢が置かれなときの語形でした。やがて「そばに」という意味が弱められ、単に「(ある場所)に」という意味でも使われるようになります。この用法の例をいくつか挙げてみます(斜線は一応の区切りを示しているにすぎず、たとえば beyond の yond のように単独では使うことができない語もあります)。

be / hind → behind 「後ろに」
[に][後ろ]
be / low → below 「下に」
[に][低いところ]
be / neath → beneath 「下に」
[に][下]
be / tween → between 「間に」

[に][間]

be / yond → beyond 「向こうに」

[に][向こう]

さらに、この接頭辞の be- に強勢が置かれますと by- 「そばに」という接頭辞になります。

強勢が置かれな → be-

強勢が置かれる → by-

興味深いことに、この by- は「そばに」という意味に加え、「副次的、付随的、間接的、内密に」という意味でも使われるようになっていきます。いくつか例を挙げます。

bý-effect 「副次効果、思いがけない効果」

bý-law 「地方条例、内規、付則」

býpass 「迂回路」(ハイフンなしで表記されます)

bý-product 「副産物」

このように、be- に強勢が置かれると確かに by- になっていることがご確認いただけると思います。

Q: without fail 「必ず、間違いなく」という表現がありますが、failure を用いて without failure としないのはなぜなのでしょう。
He comes to the office at 8 every day without fail.
「彼は毎日必ず8時に出社する」

A: 1200年代前半にフランス語から借用された動詞 fail 「衰える、失敗する」の名詞形について OED で調べてみました。

するとまず名詞として用いられたのは failure の方ではなく動詞と同じ形の fail の方でした。さらに名詞の fail が文献に初めて現れたときも without fail という決まり文句で1297年に登場しています。

failureの方は名詞の fail にかなり遅れて1600年代半ばようやく誕生しました。ところが、その後しっかりと定着し、ついには名詞の fail に取って

代わり現代に至っています。

ただし、without fail 中の fail に取って代わるまでには至らず、この決まり文句は当時(1297年)のままの形で残され使われ続けています。

余談になりますが、OED を見ていて面白いのは現在では使われなくなった単語にもお目にかかることができることです。たとえば、1800年代の例文に 'failer or succeder' とありました。おそらく「失敗者か成功者」という意味だろうと思われ、現代の英語では「失敗者」には failure を、「成功者」には success を使うことは言うまでもありません。しかし、新たに用いられた語のすべてが定着するというわけではありません。

Q: be about to do ~ 「まさに~しようとしている」という表現がありますが、文法的にはどうなっているのでしょうか。

The plane is about to take off.

「飛行機はまさに離陸しようとしている」

A: be about to do ~ は1500年代の文献に載った比較的新しい表現です。about は「辺りに、近くに」という意味の副詞で、上の例文は「飛行機は離陸するのに近い→離陸しようとしている」ということとなります。

余談になりますが、about 100 people 「およそ100人」というのはもともと「100人に近い人」という意味です。talk about the Internet 「インターネットについて語る」というのは「インターネットという話題に近いことを→インターネットという話題から離れずに→インターネットについて語る」という意味で、いずれの場合にも about がもつ「近くに」という原義が生きているのがおわかりいただけると思います。

さらにこの be about to do ~ は「予定」を表す be to do ~ にさきほど述べた副詞の about が添えられたようなもの、と考えていいのではないのでしょうか。

Our guests are to arrive tomorrow.

Our guests are **about** to arrive.

ご存じのように be to do ~ には「予定」、「運命」、「義務」、「可能」などの用法がありますが、次の例でも副詞が添えられたことにより、その be to do ~ がいったいどんな意味・用法で使われているのか

ずっとわかりやすくなっています。

My key is **nowhere** to be found.

「鍵がどこにも見あたらない」

The biggest change is **yet** to come.

「最大の変化はまだ起こっていない」

Q: あるとき、次の w と g で始まる語同士には一定の対応関係があることに気づいたのですが…
warden — guardian (保護者)
warranty — guarantee (保証)

A: この見事な対応は、北欧のヴァイキングたちの仕業です。もし彼らがいなかったら、恐らく上の例の w- で始まる語も、英語の語彙を飛躍的に増大させた the Norman Conquest もなかったことでしょう。少し脱線してヴァイキングたちのことを述べさせていただきます。

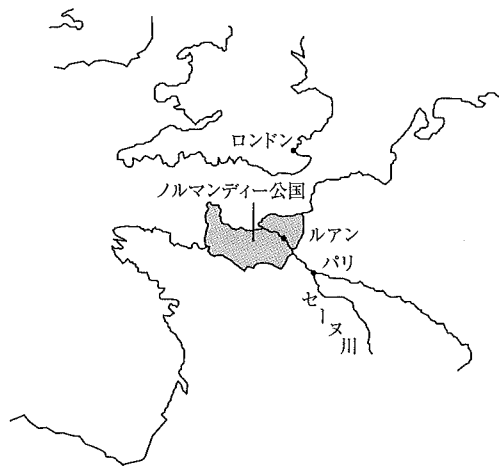
750年頃から彼らの略奪行為は本格的になります。ヴァイキングたちは春になり畑を耕し種をまくと、後のことは奴隷たち(大陸から連れてこられた人たちなど)に任せ、船団を組み、略奪の航海に出かけます。秋になると略奪した品物で船を一杯にし、西風によってスカンジナビアに戻ってくるのです。当時、北欧は比較的温暖化していました。

このようなことを繰り返していくうちにスカンジナビア半島の人口が増え、移住する必要が生じたようです。このため、彼らの目的は初期の「出稼ぎ」的な略奪から定住を目指す入植地の確保へと変化していきました。ヴァイキングたちは新しい土地に入植するとその土地の言葉を器用に身につけ、定住していきました。

肥沃な土地を求める彼らの矛先がいよいよフランス北西部の海岸地方へと向けられます。入植地を求めるヴァイキングたちがロロ(ノルウェーのヴァイキングの首領の子)に率いられ、フランスのセヌ川河口地帯を荒らし始めます。ヴァイキングと聞いただけで農民たちは畑を放棄し、逃げ出しました。ロロはルアンに陣営を築き、海岸地方一帯を支配します。892年にはパリを包囲するほどになり、セヌ川一帯に居座り続けます。

当時の西フランク王シャルル三世はヴァイキングたちの執拗な攻撃に屈し、彼らと交渉の末、ロロが支配していたフランス北西部の海岸地方を分け与

えました。ロロはシャルル三世に忠誠を誓い、洗礼を受け、パリを外敵から守ることを約束したのです。こうしてノルマンディー公国が誕生しました(911年)。



※『英語のしくみが見える英文法』(文芸社)のp.164より
彼らは巧みにフランス語を身につけていきます。そして、このノルマンディー公国は、フランス王家やイギリス王家と婚姻関係を築きながら(イギリス王家とは1002年で、これがthe Norman Conquestの伏線となります)、政治、文化、建築、交易などの分野で当時のヨーロッパの先進地域へと発展していきます。

さらに、この国を興したロロから数えて七代目の王ウィリアムが1066年、イギリスの王位継承権を主張してイギリスに攻め込み、英語史上最大の事件であるthe Norman Conquestを成し遂げたのは有名です。

話を本題に戻したいと思います。さきほど入植したヴァイキングたちは巧みにフランス語を身につけたと申しましたが、彼らが身につけたフランス語は、パリ周辺で話されていた標準フランス語とは方言の関係にあったのです。たとえば、標準フランス語のhotelをhostelと言ったり、標準フランス語のg-がw-に置き換わっていたのです。

さらに、対応する次の各語が英語に借用されるとき、ある興味深い原則が存在しました。これらの語が英語の文献に初めて載った年を比べてみましょう。

warden(1225) — guardian (1330)

warranty (1381) — guarantee (1679)

お気づきかと思いますが、まずノルマンディー方言に由来する語が、続いて標準フランス語に由来

する語が借用されました。これはthe Norman Conquest以降、イギリス人が最初に接触するフランス語はノルマンディー方言に由来する語の方だったからです。

また、近代に入ってから次のような派生語も登場しています(意味はともに「保証人」)。

warrantor (1685) — guarantor (1853)

ついでにノルマンディー方言に由来するwar「戦争」とwarrior「(戦争をする人→兵士)」についても見ておきましょう。warというノルマンディー方言に対応する標準フランス語の「戦争」を表す語はguerreで、英語に借用され1400年代の文献に登場したのですが、定着せずに歴史の闇に消えていきました。

また、warrior「兵士」(もっぱら詩や文学に用いられます)に対応する当時の標準フランス語は、guerreierなので、これは英語には借用されませんでした。ラテン語に由来するsoldierという立派な単語がすでに存在していたからだと思われる(語源は「給料をもらって戦う人」)。

ところが、借用されなかったguerreierと同語源でスペイン語のguerrilla「ゲリラ」という単語が1809年英語に借用されたのです。イベリア半島でナポレオンの侵入に抵抗を続けるスペインの農民兵の勇敢な姿が当時の人たちにとって印象的だったのかもしれませんが、このguerrillaのgとwarriorのwの関係も今回扱った対応の一例になります(英語のこのような背景に興味をおもちになった方は、今春第7刷となりました拙書『英語のしくみが見える英文法』(文芸社)を図書館に入れていただければ身に余る光栄です)。

参考文献

井上 永幸・赤野 一郎、ウィズダム英和辞典 第2版、東京：三省堂

ルイ＝ルネ・ヌジエ、1990、世界の生活史 6 ヴァイキング、東京：東京書籍

The Oxford English Dictionary, 2nd ed.
Oxford: Oxford University Press.

(新潟県立三条高等学校教諭)